

研医会図書館所蔵の森立之著『温疫論割記』

安部 郁子

公益財団法人 研医会図書館

研医会図書館には森立之の『温疫論割記』がある。昨年、一昨年にご紹介した『辛酉漫録』『千金方疏証』同様、森立之の弟子、林用之の筆写である。また、京都大学富士川文庫、九州大学医学図書館には山田業廣の『温疫論札記』がある。この山田の書とも比較しつつ、当館所蔵の『温疫論割記』について紹介したい。同じ伊沢蘭軒門下の森立之と山田業廣ではあるがその違いはあるだろうか。

【書誌について】 森立之著『温疫論割記』上下巻2冊、大きさ23.6×16.8cm、表紙題箋は白紙。本文は四周単辺、有界(刷)、10行の用箋を使って書かれている。表紙裏には3行の書入れ、巻頭は「温疫論割記 卷上 江戸 枳園森立之」とあり、上巻の末には、「安政戊午三月三日灯下撮抄／温疫論烏絲欄 上了 森立之」と書かれている。下巻の後には「安政戊午三月八日講此書于草堂因別抄録割記数條以付與二三学友併備他日遺忘云華佗巷人森立之」と記される。上巻33丁、下巻16丁。

【内容】 吳又可著『温疫論』上巻目次50項目のうち、森立之が項目を挙げていないのは、「下後間服緩劑」「下後反痞」「神虚譚語」の3項目のみ。下巻は37項目のうち、「舎病治薬」「疫痢兼證」「正名」「傷寒例誤」「諸家温疫正誤」の5項目は記述がない。取り上げている箇所が多いものを、目次に出てくる順に挙げると(括弧内はその数)「原病」(22)、「温疫初起」(15)、「畜血」(9)、「辨明傷寒時疫」(17)、「戰汗」(8)、「大便」(10)となっており、他の項目についてのコメントは4箇条以下である。下巻の中で記述の多い項目は「應下諸證」(13)、「四損不可正治」(7)「雜記論」(4)等である。

引用書は、上巻で19、下巻で21、4書が上下巻に出る。多い順に『傷寒論』43、『千金方』『金匱』各6、『外台秘要方』4、『素問』『古今録驗』各3、『諸病源候論』『証類本草』『三因方』『傷寒全生集』各2、『説文』『明医雜著』『傷寒闡要編』『楊氏家藏方』『直指方』『藥治通義』『神農本草經』『玉機微義』『呂氏春秋』『千金翼方』『玉函經』『脈經』『日本記略』『易簡方』『千金翼方』『濟衆方』『衛生家寶』『衛生宝鑑』『濟生拔萃』『潔古家珍』『靈樞』『列子』『傷寒実録』『万病回春』『松峰説疫』各1。

名前の挙げられた医家は、吳又可(吳氏)59、張仲景(仲景・張氏・長沙)18、伊沢蘭軒9、多紀元堅(菑庭)李東垣 各4、原南陽、吉益(東洞・吉益流・吉益為則)各3、劉純2、王綸、閔芝慶、楊俠、柳沂、喻嘉言、華佗、森立之、黒川道祐、吳勉学、朱瑞章、潔古(張元素)各1。

【比較】 森立之の『温疫論割記』の特徴としては、吳又可の新しい治療法や考え方に対して『傷寒論』の考え方で対応できるのではないかと反論し、時に「可笑」という表現まである。吳又可のいう温疫は傷寒であると述べ、病が異なってみえるのは邪気の軽重や人の虚実が違うからだとしている。

一方山田業廣は『医学心得方大略』の中で必読書の中にこの『温疫論』を挙げている。『温疫論札記』上巻34丁、下巻24丁(富士川本)は業廣が温疫論の講義をするために作ったもので、引用書は上巻で60、下巻で51あり、丁寧な研究をした様子が伺える。その中で数の多いものは劉松峯評釈の『温疫論類篇』が99、『傷寒論』25、『温疫論』24、『素問』14、『荀子』6、『靈樞』6、『説疫』4、『活人書』3などがある。また、人名も、劉松峯96、吳又可14、馬印麟6、李時珍5、葉天士4、徐靈胎、張仲景各3、劉完素、多紀元堅、森立之、俞嘉言、劉方舟各2、と森立之の参考にしている医家たちと少し異なる人物名が続き、印象としては、中国古典をしっかりと把握した上、明清の医家の文献も相当読んでいるようにみえる。方剤については両者とも承氣湯類、白虎湯を多く取り上げているが、森立之は柴胡剤も多く挙げている。今後はさらに両者の読み方の違いなどを探求してみたい。